

「百鬼夜行絵巻」編集の系譜

——情報学からの解明

1 「百鬼夜行絵巻」をめぐる謎

室町時代から江戸時代にかけて模写されたとみられる、俗に「百鬼夜行絵巻」と総称される絵巻類が各地に伝存している。「鬼」たちの姿がユーモラスに描かれているので、たいへん人気がある。またその模本が多く伝存している点でも、日本美術史上の重要な絵巻だといえよう。「百鬼夜行絵巻」は、中世から近世にかけての日本の複製文化のひとつだともいえる。

「百鬼夜行絵巻」といえば、大徳寺真珠庵が所蔵する重要文化財の「百鬼夜行絵巻」（伝土佐光信画）が有名だ。「百鬼夜行絵巻」は、この真珠庵本とその模本を中心に研究されてきた。^①真珠庵本は、数ある「百鬼夜行絵巻」のなかで模写年代がもっとも古いとされ、それを基準に研究がなされてきたのは自然なことだろう。

山 田 奨 治

しかし、真珠庵本系統の「百鬼夜行絵巻」の先行研究で、見落とされてきたことがある。それは、真珠庵本とおなじ図像を持つ伝本は多いが、図像配列までがまったくおなじ模本は、ほとんど見いだせないことだ。

もし「百鬼夜行絵巻」の複製文化のなかで、真珠庵本が重要な位置にあるというならば、それをそっくり写した模本が、もつとたくさん残っていてもよさそうなものだ。しかし、現実には真珠庵本とまったくおなじ図像配列の模本は、わずかしかなかった。

真珠庵本は、同系統の「百鬼夜行絵巻」のなかの数あるバリエーションのひとつに過ぎないのではないだろうか。そしてその祖本の図像配列は、真珠庵本とは異なっていた可能性はないだろうか。

「百鬼夜行絵巻」の研究者らは、真珠庵本の位置づけを見直す必要性を口々に述べてきた。たとえば、田中貴子は「真珠庵本はおそ

らく『百鬼夜行絵巻』の原型ではなく、むしろ特殊な例だったと思われる。つまり、中世から近世にかけて流布したいろいろな『百鬼夜行絵巻』諸本のなかから、突出的に広まったのが真珠庵本ではなかったか^②、湯本豪一は「仮に真珠庵系を標準タイプとするならば、そこに新たな妖怪が描き込まれたものと、いくつかが削られた絵巻が存在する。真珠庵本の位置づけをするには、こうしたかかわりのあるタイプの百鬼夜行絵巻との関連を明確にする必要があるといえよう^③」といった。こういった先行研究を受けて小松和彦も「百鬼夜行絵巻の伝本の流れを考えるうえで、いったん真珠庵本を括弧に括って脇に置かねばならなかった^④」と述べている。

この論文では、真珠庵本の位置づけに新たな説を付け加える。

「百鬼夜行絵巻」には真珠庵本系統のほかにも、それとは異なる図像から成る伝本や、ふたつの伝本の図像が混じったものもある。田中貴子は、それらのなかの東博模本と呼ばれる伝本に着目した。東博模本は真珠庵本に描かれた図像をすべて含み、そのほかにも真珠庵本にはみられない図像が多数描かれている伝本である。この東博模本の祖本が真珠庵本よりも先にあり、真珠庵本は東博模本にある図像を整理して作られた分離本だとする説を、田中は出した^⑤。

ところが、二〇〇七年に国際日本文化研究センター（日文研）が購入した「百鬼ノ図」（日文研A本）という絵巻は、東博模本から真珠庵本を差し引いた図像で構成されていることがわかった。小松和

彦は「百鬼ノ図」について調査し、その祖本は真珠庵本とおなじ室町時代までさかのぼることができると鑑定結果を示した。そして田中説とは反対に、東博模本の祖本は真珠庵本系統と日文研本系統の合本であると論じた。それと同時に、「百鬼夜行絵巻」には真珠庵本系統、日文研本系統、京都市藝大本系統、兵庫県歴博本系統の、互いに図像が重なることのない四つの系統があり、それらが合本していくつもの種類の伝本が生まれたと、小松はいった^⑥。

小松の研究は、アメリカやヨーロッパに伝存するものを含む六十四の伝本を視野に置き、「百鬼夜行絵巻」の世界の総体を論じたはじめてのものであった。これまでに知られているすべての伝本の写真を集め、各伝本に一貫性のある名称を与えたことも特筆すべきことである。小松の成果によって、「百鬼夜行絵巻」研究はまったく新しい段階を迎えた。

種々の伝本をみわたすと、小松がいうように「百鬼夜行絵巻」のなかには真珠庵本系統と日文研本系統の合本、真珠庵本系統と京都市藝大本系統の合本、真珠庵本系統と兵庫県歴博本系統の合本がみられる。分離本説に立つならば、こうした種々の合本から、真珠庵本系統の図像とその他の系統の図像が、重複なくきれいに分離したことになる。だがそれは考えにくいことだ。分離本説と合本説をくらべてみると、後者のほうがより合理的だと思う。すなわち「百鬼夜行絵巻」の諸伝本は、真珠庵本系統、日文研本系統、京都市藝

大本系統、兵庫県歴博本系統の四種類の祖本があり、それらが組み合わさって東博模本をはじめとする合本が生まれたとする小松の説に、わたしも同意する。

しかしながら、小松によるものを含む先行研究では、描かれた図像の異同やその解釈に関心が集まっており、図像配列に着目する視点は弱かった。小松によって六十を超える諸伝本の画像が収集され整理されたいま、「百鬼夜行絵巻」が絵師から絵師へと描き継がれ編集されていった過程を推定復元することもできよう。

では、どのような方法を使えば、その目論見を達成することができだろうか。本論文では、その方法の拠り所を情報学に求め⁽⁷⁾。絵の稚拙などの美的な基準を用いず、解釈もしない。図像の細かな相違に拘泥して同一性の判断を避けるよりも、図像の先後関係をみておなじ「鬼」を描いていると判断できれば積極的におなじ図像とみることにする。そして図像配列をDNAの塩基配列のように見立てて伝本間の近さを数値化し、「百鬼夜行絵巻」の系統樹を推定する。

美術史の分野で、このような数理解析的な手法を用いた先行研究は多くはない。近年のものでは、浮世絵美人画や快慶作の阿弥陀仏の顔貌を対象にした⁽⁹⁾、著者自身がかかわった研究や、龍安寺石庭を対象にした視覚分析が⁽¹⁰⁾、わずかにあるだけである。本研究のように、図像の配列に着目して絵巻の伝本間の関係を分析した研究は、管見

による限りみあたらない。

2 絵巻編集過程の推定モデル

絵巻の編集過程を推定するにあたって、つぎのようなモデルを想定する。それは、差異の少ない絵巻ほど編集上の距離が小さく、転写の連鎖のなかで近い関係にあるとするモデルである。たとえば、絵巻A・B・Cの三種があつたとして、AとBは一カ所、BとCは一カ所、AとCは二カ所異なるという場合、Aを編集してBが作られ、Bを編集してCが作られた（もしくはその逆順）と推定するのがいちばん「もつともらしい」と、このモデルでは考える。もちろん、Bを媒介せずにAを二カ所編集してCが作られたという可能性は否定できないが、それは「もつともらしく」ない、恣意的な推定だといえよう。

具体的には情報学の編集距離（レーベンシュタイン距離）の考え方を応用する。編集距離とは、ある記号配列から別の配列へと変換するのに、挿入・削除・移動などの編集操作が何回必要かという指標である⁽¹¹⁾。編集距離は通常、記号単位での編集操作の回数を数えるものであるが、ここでは記号ブロック単位の編集操作の回数をもつて編集距離にあてることにする⁽¹²⁾。仮に記号配列の123456789（配列A）、145678239（配列B）、167845239（配列C）があり、これらの差異が編集操作によって生じた想定され

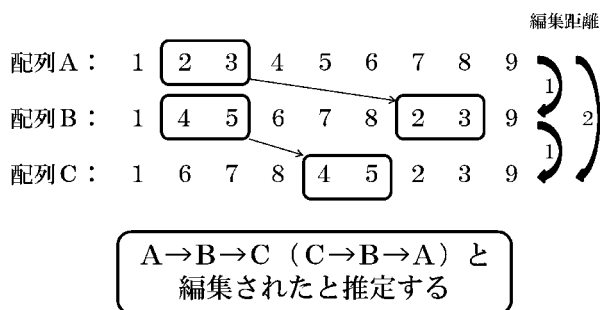


図1 記号配列間の編集距離と編集過程の推定モデル

る場合、その編集過程を推定してみよう(図1)。まず配列Aのなかの23の記号ブロックを8と9のあいだへ移動すると配列Bになる。そして配列Bのなかの45のブロックを8と2のあいだへ移動すれば配列Cになる。この場合、配列A・Bと配列B・Cの編集距離は1、配列A・Cの編集距離は2になる。そして、配列Aが編集されてBになり、Bが編集されてCになった(あるいはその逆順)とみるのが、「もつともらしい」編集過程であると考える。

あくまで推定モデルは、どう考えることがいちばん「もつともらしい」かを示すものであって、結論を断定することはできない。したがって、推定モデルから導かれた編集の系統樹に、ほかの定性的な特徴を当てはめてみて、推定結果の妥当性を検証できるところが理想的である。

またこのモデルは、何らかの方法で絵巻を分節化し、記号化できることが前提になる。「百鬼夜行絵巻」の場合、描

かれた「鬼」を個体識別することによって、記号化・分節化することが可能である。ただし、このモデルでは、絵巻が欠損している場合や錯簡がある場合には、適用することがむずかしい。だが、錯簡もまた編集の一過程だと考えるならば、この限りではない。

3 対象にする「百鬼夜行絵巻」

この論文では、日文研の怪異・妖怪文化資料データベース・プロジェクト室と小松和彦が作成したリストにある六十四の「百鬼夜行絵巻」を対象とする⁽¹³⁾。個々の絵巻等の名称も同リストに記載されたものに準じる。

小松はこれら六十四の「百鬼夜行絵巻」を類型化し整理した。小松の分類は、「百鬼夜行絵巻」の四種類の系統をA型(真珠庵本系統)、B型(日文研本系統)、C型(京都市藝大本系統)、D型(兵庫県歴史博物館)とし、個々の絵巻等をI類(単独模本)とII類(I類系の二本以上の折衷型の模本)にわけた点に特徴がある。そして、I類のA型には①詞書なし、②詞書あり、③化物尽しの図柄混入、II類にはBC型(日文研本+京都市藝大本+a)系統、AB型(真珠庵本+日文研本)系統、AC型(真珠庵本+京都市藝大本)系統、AD型(真珠庵本+兵庫県歴史博物館)系統がみられることを、小松は示した。

しかしこれらの「百鬼夜行絵巻」をより詳しくみてみると、小松のいうAB型の絵巻は、真珠庵本の図像に日文研本をつないだAB

型の構成と、日文研本の図像に真珠庵本をつないだB A型にわけることができる。同様にA D型には、A D型とD A型の伝本がある。これらのことを考慮に入れて、小松のリストを再整理すると、つぎのようになる。

A型① 真珠庵本系統（詞書なし）

真珠庵本	百鬼夜行絵巻
伊藤家本	百鬼夜行絵巻
大阪市美術館本	百鬼夜行絵巻
大倉集古館屏風	百鬼夜行図
国会A本	百鬼夜行絵巻（亥本）
京都府立総合資料館A本	百鬼夜行図
立教大本	百鬼夜行絵巻
早大A本	百鬼夜行図
日文研B本	百鬼夜行絵巻
日文研C本	百鬼夜行の図
歴博A本	百鬼夜行絵巻
湯本A本	百鬼夜行絵巻
高台寺本	百鬼夜行図
群馬大本	百鬼夜行絵巻
怪談名作集巻末付録本	百鬼夜行絵巻

A型② 真珠庵本系統（詞書あり）

国会B本	百鬼夜行絵巻（す本）	国立国会図書館蔵
スペインサーB本	百鬼夜行物語絵巻	

米国・ニューヨーク公共図書館蔵

A型③ 真珠庵本系統（化物尽しの図柄混入）

岩瀬文庫本	百鬼夜行画巻	岩瀬文庫蔵
湯本B本	百鬼夜行絵巻	湯本豪一蔵

B型 日文研本系統

日文研A本	百鬼ノ図	国際日本文化研究センター蔵
湯本C本	百鬼夜行絵巻	湯本豪一蔵

C型 京都市藝大本系統

京都市藝大本	百鬼夜行絵巻	京都市立藝術大学蔵
大倉集古館本	百鬼夜行図	大倉集古館蔵

ギメ本 百鬼夜行絵巻 フランス・ギメ美術館蔵

クラクフ本 百鬼夜行

ポーランド・クラクフ日本美術・技術センター蔵

ボストン掛軸 百鬼夜行図 米国・ボストン美術館蔵

D型 兵庫県歴博本系統

兵庫県歴博A本 百鬼夜行絵巻 兵庫県立歴史博物館蔵

怪談名作集解説挿絵本 百鬼夜行絵巻(仮称) 現所蔵元不明

B C型 (日文研本+京都市藝大本+a) 系統

東博異本 百鬼夜行図(異本) 東京国立博物館蔵

A B型 (真珠庵本+日文研本) 系統

ピーティ一本 百鬼夜行

アイランド・チェスター・ピーティー図書館蔵

宮内庁A本 百鬼夜行絵巻 宮内庁書陵部蔵

歴博C本 百鬼夜行之図 国立歴史民俗博物館蔵

唯称寺本 法具妖変之図 唯称寺蔵

湯本E本 百鬼夜行絵巻 湯本豪一蔵

B A型 (日文研本+真珠庵本) 系統

東京藝大A本 百鬼夜行 東京藝術大学蔵

プーシキン本 百鬼夜行図 ロシア・プーシキン美術館蔵

湯本D本 百鬼夜行絵巻 湯本豪一蔵

東博模本 百鬼夜行図(模本) 東京国立博物館蔵

公文本 百鬼夜行絵巻 公文教育研究会蔵

東北大本 百鬼夜行

兵庫県歴博B本 百鬼夜行図

真田宝物館本 百鬼夜行

大阪人権博本 百鬼夜行絵巻

歴博B本 百鬼夜行絵巻

耕三寺博本 百鬼夜行之図

宮内庁B本 百鬼夜行絵巻

A C型 (真珠庵本+京都市藝大本) 系統

狂画苑本 百鬼夜行

東大本 百鬼夜行図

仙台市博本 百鬼夜行絵巻

湯本F本 百鬼夜行絵巻

金刀比羅宮A本 百鬼夜行之図

金刀比羅宮B本 百鬼夜行之図

スペンサーA本 百鬼夜行

米国・ニューヨーク公共図書館蔵

バーク本 百鬼夜行

米国・バーク財団蔵

A D型 (真珠庵本+兵庫県歴博本) 系統

京都府立総合資料館B本 百鬼夜行絵巻

京都府立総合資料館蔵

東北大学附属図書館蔵

兵庫県立歴史博物館蔵

長野・真田宝物館蔵

大阪人権博物館蔵

国立歴史民俗博物館蔵

耕三寺博物館蔵

宮内庁書陵部蔵

川崎市市民ミュージアムなど蔵

東京大学総合図書館蔵

仙台市博物館蔵

湯本豪一蔵

金刀比羅宮蔵

金刀比羅宮蔵

東京藝大B本	百鬼夜行絵巻	東京藝術大学蔵
歴博D本	百器夜行絵巻	国立歴史民俗博物館蔵
愛媛県歴博本	百鬼夜行絵巻	愛媛県歴史文化博物館蔵
湯本G本	百鬼夜行絵巻	湯本豪一蔵
京極本	土佐百鬼夜行之図	京極夏彦蔵
スペンサーC本	百鬼夜行之図	米国・ニューヨーク公共図書館蔵

D A型 (兵庫県歴博本+真珠庵本) 系統

物部神社本	百鬼夜行画	物部神社蔵
土佐山内家本	異怪図	土佐山内家宝物資料館蔵
早大B本	百鬼夜行図	早稲田大学図書館蔵

冒頭に記したように、本論文では図像の細かな相違にこだわるよりも、先後の図像との相対的な位置関係を重視して異同を決定する方針をとった。したがって、個々の「鬼」の表現に軽微な差があったとしても、先後に描かれた「鬼」も含めてほぼ同一とみなしうる場合は、表現の差を問わないことにした。また、ある絵巻で左右に並んで描かれているものが別の絵巻で上下に配置されていたとしても、それらはおなじ配列とみなすことにした(図2)。

図像配列に着目する方法は、残欠や錯簡の疑いが強い絵巻には使



図2 先後関係からおなじ図像配列とみなした例(上:日本文研A本、下:東京藝大A本)

うことができない。また屏風や掛軸にも使えない。したがって、そのような種類の資料はやむなく分析対象からはずすことにした。その結果、「百鬼夜行絵巻」諸伝本は、つぎのように整理された。^[14]

系統		伝本名	同一配列の伝本	B A型
A型	真珠庵本	早稲田 A 本（冒頭の槍をもった鬼脱落）		東京藝大 A 本
	伊藤家本	ギメ本（前半欠落、日文研 B 本とも同一）、		東博模本
		高台寺本（前半欠落、日文研 B 本とも同一）		兵庫県歴博 B 本、真田宝物館本
	京都府立総合資料館 A 本	国会 A 本、怪談名作集巻末付録本		ブーシキン本（断本）
	立教大本			公文本、東北大本、
日文研 B 本		ギメ本（前半欠落、伊藤家本とも同一）、		大阪人権博本
		高台寺本（前半欠落、伊藤家本とも同一）、		歴博 B 本
		湯本 A 本		東大本
日文研 C 本				仙台市博本
歴博 A 本				湯本 F 本
スペインサー B 本				A D 型
クラクフ本				京都府立総合資料館 B 本
A 型 + a	岩瀬文庫本			歴博 D 本
B 型	日文研 A 本			愛媛県歴博本
C 型	京都市藝大本			スペインサー C 本
D 型	兵庫県歴博 A 本			D A 型
A B 型	ビーティー本（冒頭一体は日文研 A 本由来）			土佐山内家本
	宮内庁 A 本			早大 B 本
	歴博 C 本			

いっぽう、小松のリストに掲載されてはいるものの、残欠等の理由で本研究の手法になじまず、検討対象からはずした諸伝本はつぎのとおりである。

系統		伝本名	対象外とする理由
A型		大阪市美術館本	錯簡の疑い
		大倉集古館屏風	屏風
		群馬大本	残欠
		ボストン掛軸	掛軸
C型		国会B本	画像脱落・移動多数
		大倉集古館本	脱落多数、木馬あり
D型		怪談名作集解説挿絵本	全体像不明
B C型		東博異本	脱落多数
		唯称寺本	残欠
A B型		湯本E本	残欠
		湯本D本	脱落多数
B A型		耕三寺博本	画像反転・移動多数
		宮内庁B本	残欠
A C型		スペンサーA本	錯簡の疑い
		東京藝大B本	画像不明
A D型		湯本G本	残欠
		京極本	残欠
D A型		物部神社本	独自画像多数

4 真珠庵本系統の編集過程

まず、「百鬼夜行絵巻」諸本の中心的な系統である真珠庵本系統（A型）について、その画像配列から編集過程の推定を試みる。絵巻に描かれた個々の画像を記号とみなして、伝本間の編集距離を求めてみよう。たとえば、真珠庵本と歴博A本ならば、真珠庵本のかのふたつの画像ブロックを移動すれば、歴博A本の画像配列に変わる（図3）。したがって、両本のあいだの編集距離は2である。歴博A本から真珠庵本への逆変換の場合でも、編集距離は変わらない。

ここでの検討対象は、真珠庵本とくらべて画像の増減のない九本の絵巻（真珠庵本、伊藤家本、京都府立総合資料館A本、立教大本、日文研B本、日文研C本、歴博A本、スペンサーB本、クラクフ本）である。これらは画像の増減がないので、ブロック移動の回数が編集距離になり、挿入・削除を考慮する必要はない。また、巻末にみられる日輪状の物体や黒雲の表現については、異同の判定に困難を伴うため、本論文での比較対象からはずした。

これら九伝本間の編集距離を表1に示した。表1の左下半分は右上半分とおなじ数値が入るので省略してある。一見してわかるのは、立教大本の「遠さ」である。立教大本は、他の諸伝本とくらべて独自の画像配列を持っており、特異な伝本だといえる。著名な真珠庵本は、日文研B本、スペンサーB本との編集距離が1で、立教大本

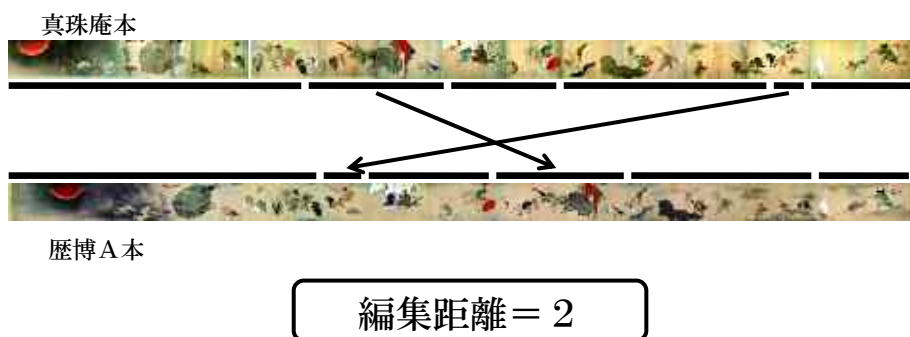


図3 図像配列間の編集距離

	真珠庵	伊藤家	京総資A	立教大	日文研B	日文研C	歴博A	スเปนB	クラクフ
真珠庵	0	2	2	12	1	2	2	1	2
伊藤家		0	2	13	1	2	2	3	2
京総資A			0	14	1	2	2	4	1
立教大				0	13	13	13	13	14
日文研B					0	1	1	2	1
日文研C						0	1	3	2
歴博A							0	4	2
スเปนB								0	3
クラクフ									0

表1 真珠庵本系諸本間の編集距離

を除くその他の伝本との距離は2となった。

ここで注目されるのは、日文研B本（湯本A本も同一配列）である。この伝本は、真珠庵本、伊藤家本、京都府立総合資料館A本、日文研C本、歴博A本、クラクフ本の六伝本との編集距離が1で、スเปนサーB本とは距離2でつながる。つまりこれら九伝本のなかで、もつとも普遍性のある図像配列を持つのは日文研B本だということになる。ちなみに、岩瀬文庫本（湯本B本も同一配列）は、真珠庵本系統に化物尽し系の図像が混入した構成をもつ。その図像配列は、混入図像を無視すれば、やはり編集距離1で日文研B本とつながる。

表1の編集距離をもとに、真珠庵本を「根」にした系統樹を作成すると図4になる。真珠庵本に日文研B本とスเปนサーB本が距離1でつながり、立教大本が距離12でつながる。さらに日文研B本から伊藤家本、京都府立総合資料館A本、日文研C本、歴博A本、クラクフ本が距離1でつながる。図4は、真珠庵本から日文研B本、そして伊藤家本をはじめとする五伝本へと、図像配列が編集されたと仮定した場合の系統樹である。

ところが、図4の系統樹は真珠庵本を「根」にした作為的なものである。もつとも単純な系統樹は、各伝本間

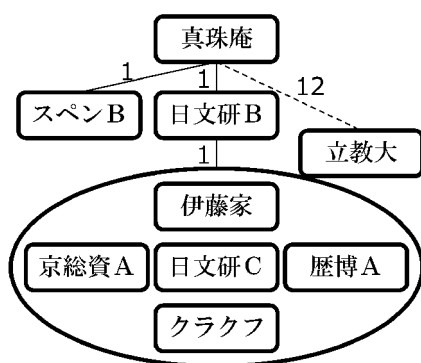


図4 真珠庵本を「根」にした系統樹

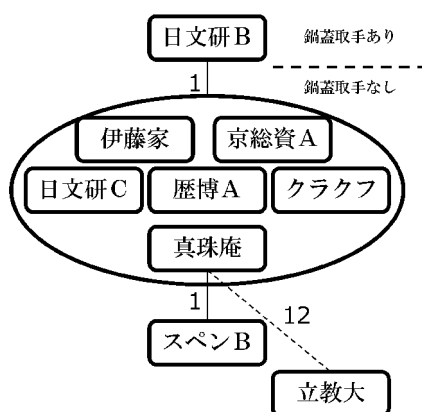


図5 もっとも単純な系統樹

の距離の合計が最小になるような木構造、つまりグラフ理論でいう「最小木」¹⁵⁾で、それを求めると図5のようになる。もっとも普遍的な図像配列を持つ日文研B本が樹の「根」に位置し、それに真珠庵本、伊藤家本、京都府立総合資料館A本、日文研C本、歴博A本、クラクフ本が距離1でつながる。これらのなかの真珠庵本からさらに距離1でスペンサーB本が、距離12で立教大本がつながる。

真珠庵本系統の諸伝本が共通の祖本を持つとするならば、日文研B本の図像配列がそれにもっとも近いことを、この系統樹は示している。すなわち、真珠庵本は日文研B本の祖本の図像を並べ替えたものだと思えることができるのだ。

この系統樹は、図像の細部の比較からも支持される。真珠庵本系統の後半に登場する「鍋蓋を被った鬼」の鍋蓋に取手が描かれているか否かという点から検討してみよう(図6)。この「鍋蓋取手」の有無については、東博模本に描かれている「取手」が、真珠庵本では塗りつぶされていることに着目した小松茂美によってすでに指摘されていた。小松茂美は「こうした仔細な写し落としは、真珠庵本のほうが、なにか本歌に基づいて描いたもの、と強く連想させるのである」¹⁶⁾といい、真珠庵本に別の祖本があることを匂わせた。

図5の系統樹に「鍋蓋取手」の有無を当てはめると、「根」に位置する日文研B本に「取手」が描かれているが、それ以外の諸伝本には描かれておらず、「取手」の有無が系統樹上できれいに分断されることがわかった。これはすなわち、日文研B本が図像配列を含めて祖本の形態を比較的よく留めている一方で、真珠庵本を含む八伝本は「鍋蓋取手」が脱落した模本を写したものであることを示している。

では、日文研B本と真珠庵本とは、図像配列はどう違うのだろうか。図7に示すように、両者は一ブロック分を入れ替えた形になっている。このような変化が生じた原因は定かではないが、真珠庵本では移動ブロックの境界が、ちょうど料紙の繋ぎ目に

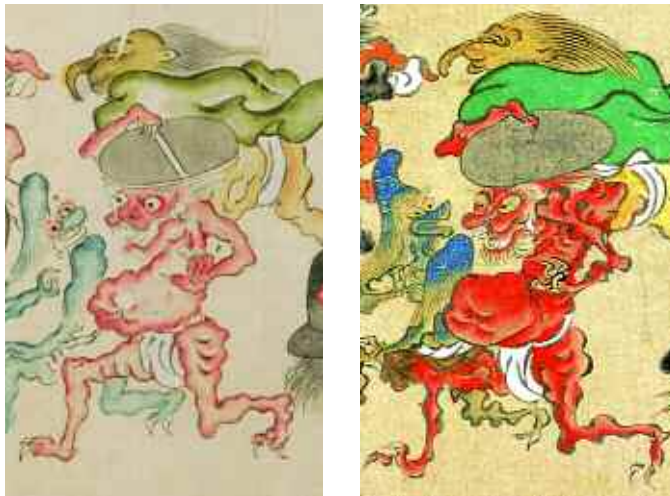


図6 「鍋蓋取手」の有無（左：日文研B本、右：真珠庵本）

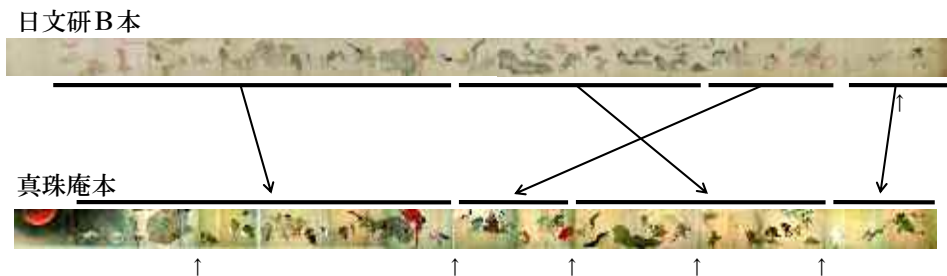


図7 日文研B本と真珠庵本の図像配列の差異（矢印は料紙の繋ぎ目で図像にかからない箇所）

重なっていることが目を引く。真珠庵本では、図像にかからない繋ぎ目が五カ所あり、そのうちの三カ所が図像配列面で日文研B本と差異がでる境界になっている。一方で、日文研B本では料紙の繋ぎ目がかつ図像にかからない箇所は、冒頭の一カ所しかない。もし、日文研B本の図像配列のほうが真珠庵本系統の祖本に近いとすれば、真珠庵本の図像配列は錯簡によって生じた可能性も捨てきれない。料紙を入れ替えるだけで、真珠庵本の図像配列を日文研B本のそれに並べ替えることができるからである。しかし、この点はより慎重な検討が必要であることはいうまでもない。

5 真珠庵本系統の図像分節

真珠庵本系統の図像を記号とみることによって、個々の「鬼」が集合して意味のある単位をどのように構成しているかを推測する手掛かりが得られる。複数の伝本間で共通して連続している図像ブロックがみつければ、そのブロックは多くの絵師が「固まり」として認識したことを意味しているからだ。

真珠庵本に描かれている「鬼」に、絵巻の先頭から順に通し番号を与えて、図像配列を記号化してみた。そう



図8 「古櫃の鬼」(日文研B本)

したところ、真珠庵本には六十七体の「鬼」が観察された。ただし、「古櫃の鬼」(図8)のように、どこまでが一体であるか判別しがたい部分もあるが、幸いこの部分の個体識別が結論を左右するものにはならなかった。真珠庵本系統の他の伝本についても真珠庵本の何番の「鬼」がどういう順序で描かれているかを識別し、記号配列化し、すべての伝本で共通する記号ブロックを抽出したものが表2である。ただし立教大本は特異な配列をもつことがわかっているため、この分析からは除外してある。

これら八伝本のあいだでは、十の図像ブロックがみつかった。07番(黒犀の鬼)と13番(錫杖をもった笹の鬼)のふたつが、ブロックを成さない図像であることもわかった。それぞれのブロックを真珠庵本のうえでみたものが図9である。06番と07番が分離しているのは伊藤家本のみで、12番と13番の分離は京都府立

総合資料館A本のみ、13番と14番は日文研C本のみである。したがって、諸伝本の全体では07番と13番がブロックを成さないといっても、それは特定の伝本の特異性に原因があり、それらふたつの「鬼」に特別な意味があるとはいえない。

図9の共通ブロックは、図像の解釈をめぐる議論に役立つだろう。たとえば、30番の「走る女狐」は、その後ろにブロックの切れ目がある。つまりこの「走る女狐」は、後続の場面から「逃げている」のではなく、まえにある「お歯黒の醜女の群像」に「駆けつけている」とみた絵師が多かったことを示している。もちろん、これはそのようにみた後世の絵師が多かったのではないかということ、祖本の絵師の意図がどうだったかまでは断定できない。

図像を記号化すると、どのような配列が各伝本に特異であるかが把握しやすくなる。表3は、各伝本を巻頭からみていったときに、どこで他の伝本とは異なる図像配列になるかを示したものである。たとえば、立教大本では01番の図像のつぎに05番がつながる。クラクフ本ならば03番のつぎに44番がくるという特徴がある。京都府立総合資料館A本と日文研B本の識別がもっとも難しく、巻頭から24番目の図像が前者は44番、後者は13番とわかる。

図像配列のこういった特異部分は、巻頭からだけではなく巻末から、あるいは絵巻の途中からでも探しだすことができる。今後、真珠庵本系統の断本が発見されるようなことがあれば、これら九伝

真珠庵	01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
伊藤家	01 02 03 20 21 22 23 04 05 06 24 25 26 27 28 29 30 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
京総資A	01 02 03 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 08 09 10 11 12 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 13 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
日文研B	01 02 03 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
日文研C	01 02 03 08 09 10 11 12 13 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
歴博A	01 02 03 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
スペインB	01 02 03 04 05 06 07 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 08 09 10 11 12 13 14 15 16 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67
クラクフ	01 02 03 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67

表2 8伝本の図像配列の共通ブロック（縦棒は料紙の繋ぎ目で図像にかからない箇所）

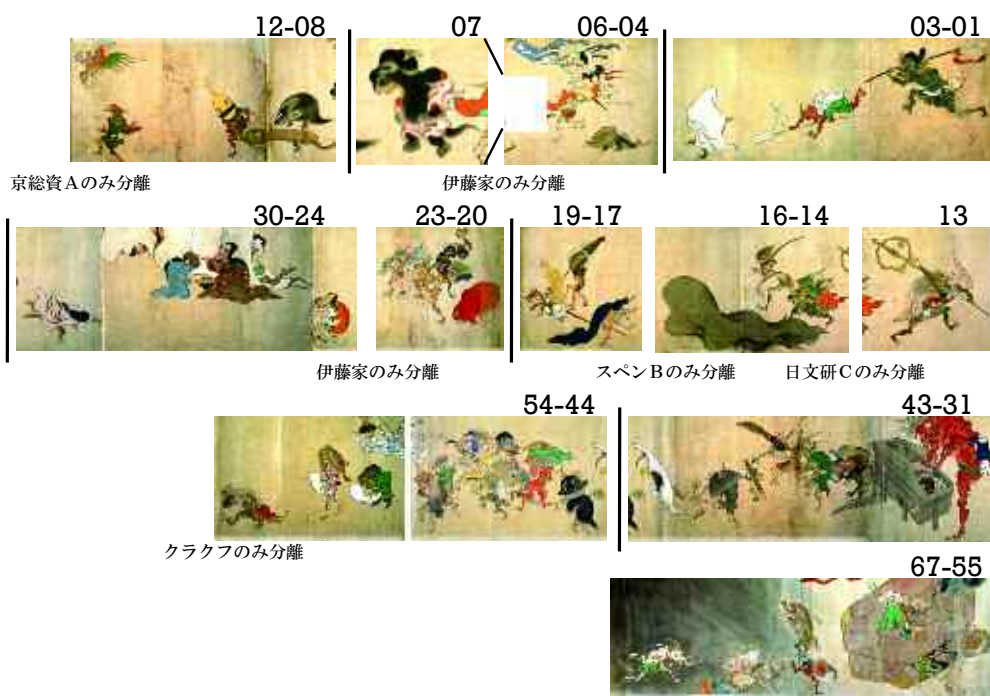


図9 真珠庵本上でみた8伝本の共通ブロック（縦棒は複数の伝本で分離している箇所）

立教大 01 05 06 07 53 14 15 11 50 51 52 45 46 47 48 49 24 25 26 27 28 29 30 31 04 12 13 08 09 10
 クラクフ 01 02 03 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 08
 スペンB 01 02 03 04 05 06 07 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39
 真珠庵 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
 日文研C 01 02 03 08 09 10 11 12 13 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 14 15 16 17 18 19
 歴博A 01 02 03 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 20 21
 伊藤家 01 02 03 20 21 22 23 04 05 06 24 25 26 27 28 29 30 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 京総資A 01 02 03 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 08 09 10 11 12 44 45 46 47 48 49 50
 日文研B 01 02 03 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

表3 真珠庵本系統諸伝本の巻頭からの図像配列

本のどれと近親性が高いかを判定する材料として、この情報が使えるだろう。

6 (真珠庵本+日文研本) 系統の編集過程

つづいて、合本系統の検討に移る。真珠庵本系統に日文研本系統が合本したA B型の検討対象にしたのは、チェスター・ビーター本、宮内庁A本、歴博C本の三伝本で、日文研本系統に真珠庵本系統が合本したB A型の検討対象は、東京藝大A本、東博模本、大阪人権博本、歴博B本の四伝本である。

これらの伝本には、図像配列に共通した特徴がある。それは絵巻の末尾近くで、真珠庵本系統の図像がつづくなかに、突如として三伝本だけ日文研本系統に由来する図像が挿入されている部分である(図10)。もしこれらの合本の祖本が異なる絵師によって異なる時代に独立して作られたならば、このような特徴がすべての伝本に共通してあらわれるはずがない。むしろ、A B型とB A型は共通の祖本を持ち、その祖本でセットされた図像配列の特徴が、のちの模本に継承されたとみたほうが自然ではないだろうか。

合本系統の伝本の特徴を、祖本で分割してまとめた結果をつぎに示す。

〈真珠庵本系統部分〉

〈日文研本系統部分〉

A B型

チェスター・ 真珠庵本と同一配列

移動・脱落

ピーティー本 (冒頭の鬼脱落)

宮内庁A本

移動・脱落

移動・変形・脱落

歴博C本

真珠庵本と同一配列

二カ所三体を残し脱落

B A型

東京藝大A本

真珠庵本と同一配列

移動・脱落

東博模本

真珠庵本を一部移動

移動・変形・脱落

大阪人権博本

真珠庵本を一部移動

移動・変形・脱落

歴博B本

東博模本と同一配列

移動・変形・脱落

合本を祖本別の配列で比較した研究は、管見によればこれまでなかったと思われる。一見してわかるのは、A B型・B A型合本の真珠庵本系統部分の図像配列は、ほとんどの場合、真珠庵本のそれであることだ。いっぽう、日文研本系統部分の図像は、日文研A本と比較して移動・変形・脱落がみられる。宮内庁A本、東博模本、大阪人権博本、歴博B本にみられる変形とは、「矛を持ち烏帽子を被った鬼」が「蛸頭の鬼」に変わっていることを指す(図11)。

真珠庵本系統部分が真珠庵本とおなじ図像配列なのは、歴博C本

と東京藝大A本であるが、日文研本系統部分は後者のほうがよく図像を残している。したがって、これらのなかで、A B型・B A型合本の祖本にもっとも近い図像配列を持つのは、東京藝大A本だと思われる。

図12に日文研A本、真珠庵本と東京藝大A本との、図像配列の異同を示した。真珠庵本系統の部分は、真珠庵本から図像配列を移動することなく、東京藝大A本は構成されている。いっぽう、日文研A本部分からは「白い布を被った鬼」が脱落し、他の図像にもやや複雑な移動が起きている。これは、東京藝大A本がこの合本の祖本に一番近い形を残す伝本だとしても、その祖本の図像配列は日文研A本からもっと単純に図像を写したものだった可能性を示している。

B A型の諸伝本のなかで東京藝大A本の図像配列がもっとも祖本に近いと仮定して、B A型の残りの伝本である東博模本、大阪人権博本、歴博B本の図像の配列関係を調べてみた。その結果、図像移動の面でもっとも単純な流れは、東京藝大A本→大阪人権博本→東博模本→歴博B本であると考えられる(図13)。まず東京藝大A本の図像から「ささらを持った鬼」が脱落し、一カ所だけ図像が重なり合って大阪人権博本の配列ができています。そのさい、冒頭の「矛を持ち烏帽子を被った鬼」が「蛸頭の鬼」に変形している。大阪人権博本を二ブロック移動すると東博模本の図像配列になる。それを

東京藝大A本



真珠庵本系統由来

日文研本系統由来

真珠庵本系統由来

図10 (真珠庵本+日文研本) 系統の共通部分



図11 「矛を持ち烏帽子を被った鬼」と「蛸頭の鬼」(左：日文研A本、右：歴博B本)

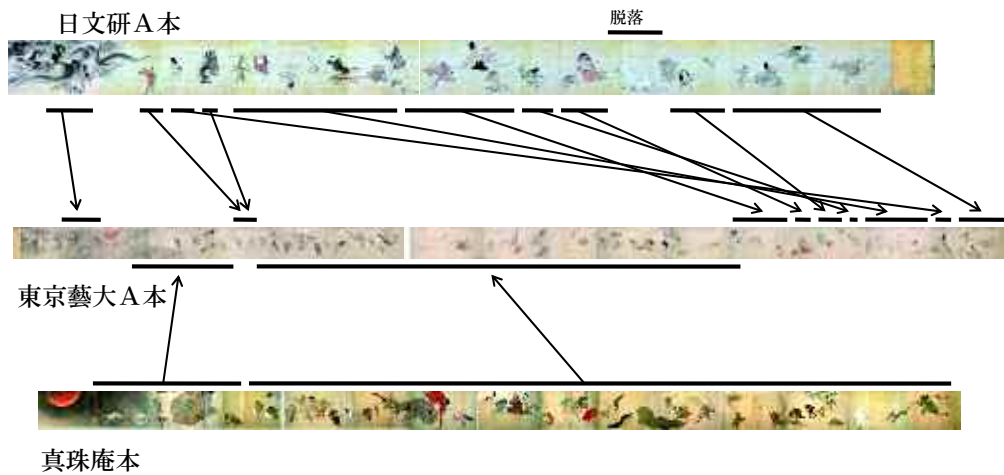


図12 日文研A本・真珠庵本から東京藝大A本へ

さらに一ブロック移動すると歴博B本になる。大阪人権博本にみられる「ささらを持った鬼」の脱落、「蛸頭の鬼」への変形という特徴は、東博模本・歴博B本でもみられる。BA型の模本が作られる過程で、じつさいにこのような順序で図像配列が入れ替えられたと断定はできないが、既知の諸伝本から推定される合理的な編集過程は以上のようなものになる。

いっぽう、AB型の三伝本のなかで祖本の形を比較的良好に残していると思われるのは、チェスター・ビーティー本である。その真珠庵本系統の図像は、冒頭の「槍を持つ鬼」一体が脱落しているだけで、他の図像配列は真珠庵本とおなじである。また日文研本系統の図像は、移動・脱落があるものの、AB型三伝本のなかでは祖本の図像をよく残している。しかし、宮内庁A本、歴博C本とチェスター・ビーティー本との関係は、前者2伝本に図像の脱落・変形が多いため推定することが困難である。

以上のことをまとめて、(真珠庵本+日文研本)系統の編集過程を推定した結果が図14である。まず日文研A本祖本と真珠庵本祖本をもとに、(真珠庵本+日文研本)系統の祖本が作られた。そこからBA型である東京藝大A本の祖本が編集されたのだが、そのいずれかの段階で「白い布を被った鬼」の図像が脱落した。さらに東京藝大A本の祖本から大阪人権博本の祖本が作られた。そのさい「矛を持ち烏帽子を被った鬼」が「蛸頭の鬼」へと変形し、「ささらを持つ

鬼」が脱落し、その他の図像に移動が生じた。この大阪人権博本祖本から東博模本祖本と歴博B本祖本が作られた。いっぽう、東京藝大A本祖本からAB型であるチェスター・ビーティー本祖本が作られた。そのさい、「槍を持つ鬼」が脱落し、その他の図像に大幅な移動が生じた。

この推定結果に、図像の細部にみられるふたつの定性的な特徴を当てはめてみよう。第一の特徴は、先に述べた真珠庵本系統の「鍋蓋取手」の有無で、第二は日文研本系統の後半にみられる「逃げる猿」の烏帽子が脱げているか被っているかである(図14左上と右下部参照)。真珠庵本祖本では、真珠庵本にみられるように「鍋蓋取手」はなかったと推定できる。また、日文研A本祖本では日文研A本のように「逃げる猿」の烏帽子は脱げる形で描かれていただろう。これらふたつの特徴は、東京藝大A本祖本からチェスター・ビーティー本祖本に引き継がれたとみられる。いっぽう、大阪人権博本祖本では、「鍋蓋取手」が描き足され、「逃げる猿」に烏帽子が被せられた。そしてこれらの特徴が、東博模本祖本と歴博B本祖本へと受け継がれたようだ。

7 (真珠庵本+京都市藝大本) 系統の編集過程

先述したように、この系統(AC型)の合本には狂画苑本、東大本、仙台市博本、湯本F本の図像配列が知られている。しかしなが

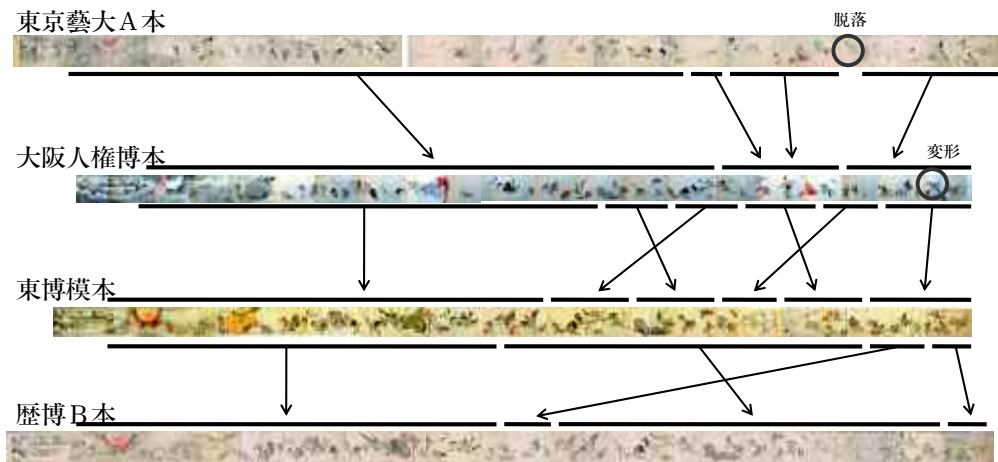


図13 (真珠庵本+日研本) 系統 (BA型) の編集過程の推定結果

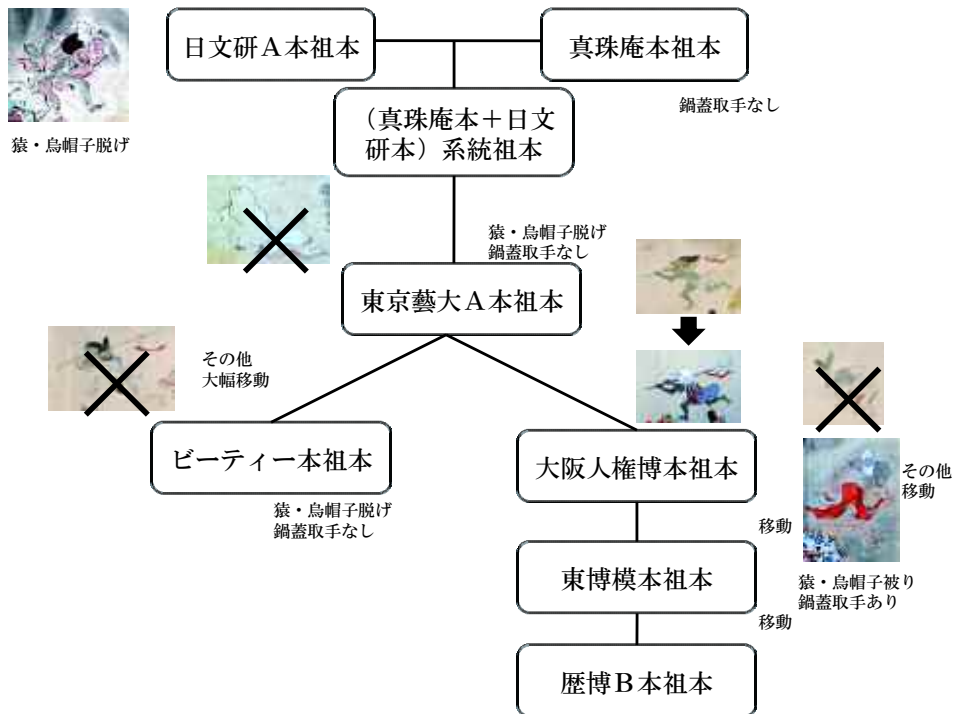


図14 (真珠庵本+日研本) 系統の編集過程の推定結果 (推定不能: 歴博C本、宮内庁A本)

ら狂画宛本以外の諸伝本は、祖本からの画像の脱落が多く、追加や移動もあるので、編集距離から系統樹を作る手法を適用することは困難である。だが、これらいずれの伝本においても、真珠庵本系統部分の画像配列は、真珠庵本ではなく日文研B本がベースになっているようだ。

日文研B本、京都市藝大本から狂画宛本とおなじ画像配列を持つ金刀比羅宮B本への変換過程を図15に示した。真珠庵本系統の部分は、日文研B本をふたつに割って貼り付けたような画像配列で、京都市藝大本からは二カ所の画像が使われている。細部を見ると狂画宛本には画像の変更が多数みられるが、画像の先後関係を重視する立場からみて、細部の変更はあってもこれらはおなじ「鬼」を描いていると判断した。

AC型の編集過程は、図16のように推定される。真珠庵本系統の祖本は日文研B本の祖本とみられる。それに京都市藝大本の祖本が合本して（真珠庵本+京都市藝大本）系統の祖本が作られ、そこから狂画宛本の祖本が作られた。その他の諸伝本は狂画宛本の祖本を編集して作られたとみられる。真珠庵本系統の「鍋蓋取手」は、日文研B本の祖本にはあつたと推定され、現存するAC型の諸伝本にも「取手」は描かれている。⁽¹⁷⁾

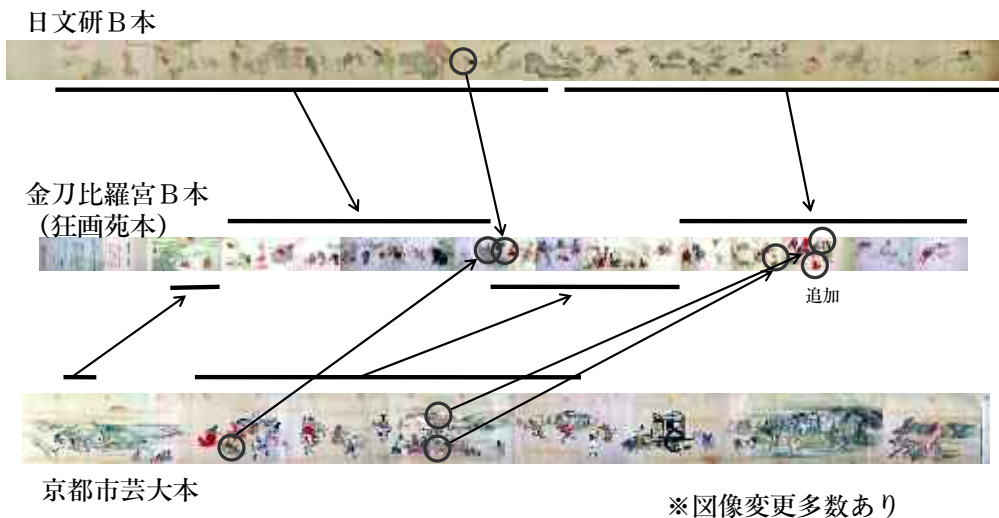


図15 日文研B本、京都市藝大本から金刀比羅宮B本（狂画宛本）へ

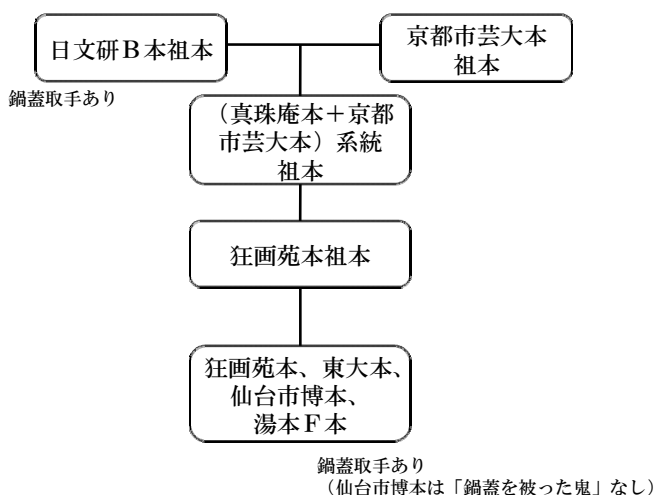


図16 (真珠庵本+京都市藝大本) 系統の編集過程の推定結果

8 (真珠庵本+兵庫県歴博本) 系統の編集過程

合本系の残りのひとつ、A D型とD A型について編集過程を推定する。前者の伝本には京都府立総合資料館B本、歴博D本、愛媛県歴博本、スペンサーC本が、後者には土佐山内家本、早大B本が知られている。これら伝本の特徴を祖本別に分割して示すと、つぎの

ようになる。

〈真珠庵本系統部分〉		〈兵庫県歴博本系統部分〉	
A D型		追加・移動・脱落	
京都府立総合資料館B本	日文研B本と同一配列	追加・移動・脱落	
歴博D本	日文研B本残欠	スペンサーC本に類似	
愛媛県歴博本	独自配列	追加・移動・脱落	
スペンサーC本	日文研B本	京都府立総合資料館B本から	
(冒頭三体脱落)		一体移動	
D A型			
土佐山内家本	独自配列	スペンサーC本と同一配列	
早大B本	京都府立総合資料館A本	スペンサーC本と同一配列	
と同一配列			

A C型とおなじく、A D型においても真珠庵本系統の部分に、真珠庵本ではなく日文研B本の図像配列の影響がみられる。これらのなかでは、日文研B本の配列をよく残している京都府立総合資料館B本かスペンサーC本が、この合本の祖本にもっとも近いようである。

日文研B本、兵庫県歴博A本と京都府立総合資料館B本との図像の配置関係を図17に示した。日文研B本の図像は単純に分割・転写されているものの、兵庫県歴博A本の図像からの転写関係は複雑で

あり、しかも京都府立総合資料館B本には兵庫県歴博A本にはみられない図像が二カ所挿入されている。この結果は、兵庫県歴博A本自体が、その祖本にあった図像を描き落とし、図像移動を繰り返した伝本である可能性を示している。

以上のことから、この合本の編集過程は、図18のように推定される。まずこの合本の真珠庵本系統の部分は、日文研B本の祖本が用いられたとみられる。それと兵庫県歴博A本の祖本とのあいだでの系譜が考えられる。第一は、まず京都府立総合資料館B本の祖本が生まれ、そこから「薪を背負った鬼」の位置が移動してスペンサーC本の祖本が生まれたという系譜である。第二は、スペンサーC本の祖本が先に作られ、それをもとに京都府立総合資料館B本の祖本が生まれたという逆の系譜である。スペンサーC本では、その祖本から冒頭の三体が脱落した。またスペンサーC本の祖本から兵庫県歴博本系統の図像配列を受け継いで、歴博D本、土佐山内家本、早大B本が生まれたのだろう。兵庫県歴博A本は、その祖本から二カ所五体の「鬼」が脱落し、その他の図像も大きく移動しているとみられる。また愛媛県歴博本は、独自の配列を持つため位置づけが難しい。「鍋蓋取手」にかんしては、AD型・DA型いずれの伝本にも描かれていない。日文研B本の祖本には「鍋蓋取手」があったとみられるので、おそらくこの合本の祖本が作られたところに描き落

とされたのだろう。そうだとするならば、AD型・DA型で「鍋蓋取手」が描かれてある伝本が、この系統のミッシング・リンクとして残ることになる。

9 「百鬼夜行絵巻」編集過程のまとめ

真珠庵本系統および各種の合本の編集過程を個別に推定した結果をまとめてみよう(図19)。もつとも重要なことは、真珠庵本系統の諸伝本のなかでは、日文研B本の図像配列のほうが現在の真珠庵本のそれよりも古いのではないかという点にある。そして日文研本系統との合本(AB型・BA型)は現在の真珠庵本もしくはその模本とのあいだで起きたが、京都市藝大本系統との合本(AC型)および兵庫県歴博本系統との合本(AD型・DA型)は、日文研B本の祖本とのあいだで起きたと推定できる。

これらのうち、年代がはっきりしているのは、AC型の伝本(版本)で安永四(一七七五)年の奥付がある『狂画苑』しかない。したがって、(真珠庵本+京都市藝大本)系統の祖本は一七七五年以前に成立していたことは確かである。

そのほかに年代が特定できる材料としては、本論では精査しなかったBC型伝本の東博異本がある。東博異本は、京都市藝大本系統の図像に日文研本系統の図像が混じり、またいずれの伝本にもみられないような「鬼」も描かれている。またそれには元和三(一六一

日文研B本

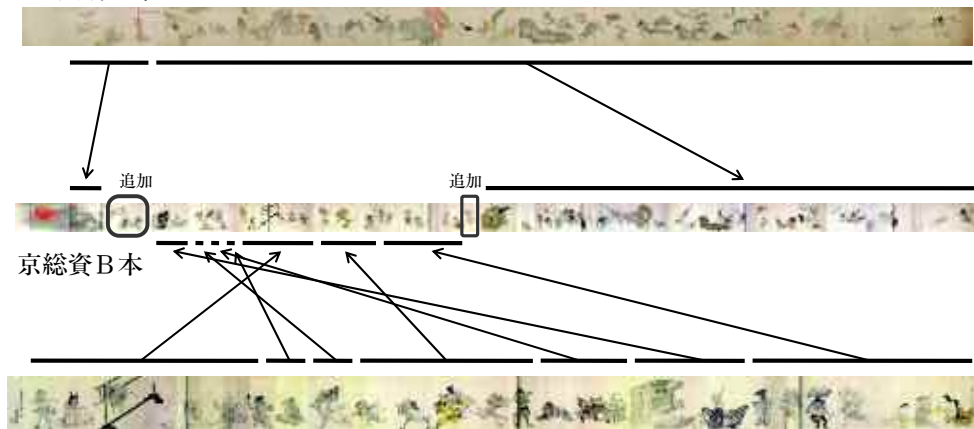


図17 日文研B本、兵庫県歴博A本から京都府立総合資料館B本へ

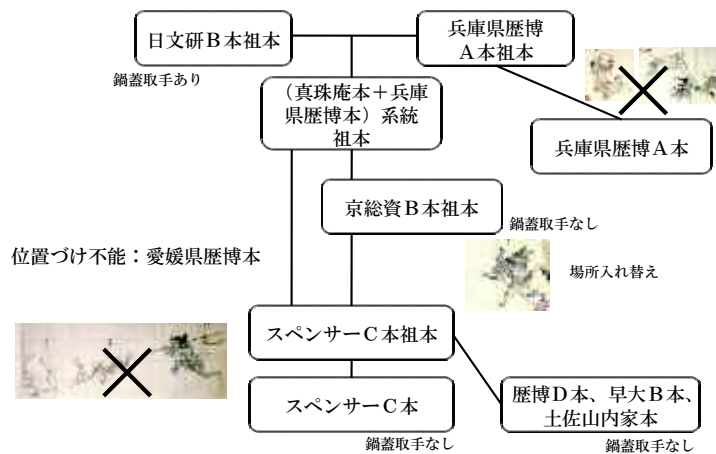


図18 (真珠庵本+兵庫県歴博本)系統の編集過程の推定結果

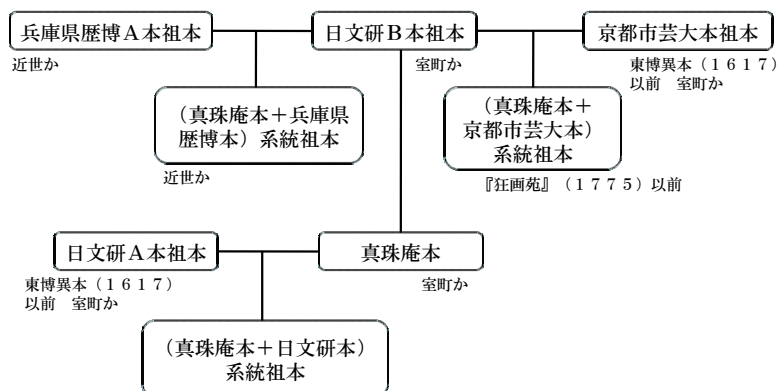


図19 「百鬼夜行絵巻」諸祖本の編集過程の推定結果

七)年の記載があるので、日文研本の祖本も京都市藝大本の祖本もそれ以前に成立していた可能性が高い。また描かれた衣服や風俗から、これら祖本が室町時代に成立したとみる説もある。真珠庵本は室町時代の模写とされているので、日文研B本の祖本はそれ以前の成立であつたろう。いっぽう、兵庫県歴史博本の祖本の成立は近世とみられていることから、真珠庵本系統との合本(A D型・D A型)が生まれたのも近世以後と推定できる。

「百鬼夜行絵巻」の図像配列に着目した情報学的な解明からは、以上のような推定結果が導かれた。分離本説ではなく合本説に立ち、残存する伝本からその合理的な編集過程を推定復元し得たことから、合本説はさらに有力になったといえよう。

だが、本論文の研究手法には大きな弱点もある。図像配列の変化が錯簡によるものであつた場合、推定結果に大きく影響する場合があります。錯簡の可能性が高いといわれているスペンサーA本は、検討対象からあらかじめ除外したが、今後、他の伝本で錯簡があきらかになった場合は、再検討が必要になるだろう。しかし、錯簡もまた絵師以外の者による編集と考え、錯簡のある本を原本にして模本が作られた可能性をも否定しないならば、錯簡本をすべて除外する必要はないのかもしれない。

合本説を完全なものにするためには、本論ではなしえなかったふたつの謎解きがさらに必要である。第一は、四系統の異なる祖本が

あつたとするならば、真珠庵本系統ではない模本の残存が少なくともいのかである。真珠庵本系統は二十二本あるのに、日文研本系統、京都市藝大本系統、兵庫県歴史博本系統はそれぞれ二本ずつしか見つかっていないのだ。第二は、合本の片方が必ずといっていいほど真珠庵本系統なのはなぜなのかである。四系統の独立した祖本があつたとするならば、真珠庵本系統ではない系統どうしの合本がもつたあつてもよさそうなのである。唯一の例外としてBC型の東博異本があるが、BD型やCD型の伝本が見いだせないのは謎としかいようがない。可能性としては、「百鬼夜行絵巻」を模写してきた絵師集団が持つていた、何らかの特性に原因があるのだろう。その点をあきらかにする作業は、今後の美術史研究に委ねたい。

謝辞

この論文での図像の比較には、小松和彦を中心とする日文研「怪異・妖怪文化資料データベースプロジェクト」が撮影・収集した写真を借用した。本研究の内容を口頭発表したさい、貴重なコメントを下さった日文研「怪異・妖怪文化の伝統と創造——前近代から近現代まで」共同研究会(代表者・小松和彦)のみなさんに感謝を申し上げる。

図版出典

大阪人権博本 大阪人権博物館所蔵
京都市藝大本 京都市立藝術大学藝術資料館所蔵

京都府立総合資料館B本 『もののけ——描かれた妖怪たち』富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館、一九九七年
金刀比羅宮B本 金刀比羅宮所蔵
真珠庵本、東博模本 田中貴子ほか『図説 百鬼夜行絵巻をよむ』河出書房新社、一九九九年
東京藝大A本 東京藝術大学大学美術館所蔵
日文研A・B本 国際日本文化研究センター所蔵
兵庫県歴博A本 兵庫県立歴史博物館所蔵
歴博A・B本 国立歴史民俗博物館所蔵

注

- (1) 「百鬼夜行絵巻」の優れた研究論文に以下のものがある。小松茂美『「百鬼夜行絵巻」の謎』小松茂美編『日本絵巻大成25 能恵法師絵詞 福富草紙 百鬼夜行絵巻』中央公論社、一九七九年、一二六—一四一頁。小峯和明「スペンサー本『百鬼夜行絵巻』について——詞書を中心に——」『中世文学研究』第二三三号、一九九七年、六九—七九頁。小林法子「守房筆百鬼夜行絵巻」『デアルテ』（九州藝術学会）第一三三号、一九九七年、一八—四一頁。河口絵里奈「百鬼夜行絵巻諸本を読む」『藤女子大学 国文学雑誌』第六七号、二〇〇二年、七七—九二頁。古賀秀和「国立国会図書館蔵『百鬼夜行絵巻』（詞書付）について」『文献探究』第四四号、二〇〇六年、一二—二頁。
- (2) 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』ちくま学藝文庫、二〇〇二

年、二二〇頁（初版は新曜社、一九九四年）。

- (3) 湯本豪一『百鬼夜行絵巻 妖怪たちが騒ぎだす』小学館、二〇〇五年、五三頁。

(4) 小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』集英社新書、二〇〇八年、一六四頁。

(5) 田中貴子前掲書、二二〇—二二八頁。

(6) 小松和彦前掲書。

(7) より正確にいうなら、生物情報学とグラフ理論の方法を応用する。

(8) 山田奨治、早川聞多、村上征勝、埴原和郎「浮世絵における顔表現の科学」『日本研究』第25集 二〇〇二年、一三—四九頁。

(9) 青木淳、山田奨治「仏像の数量分析の試み——快慶による如来形像の流れ」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』二〇〇三年、五五—六二頁。

(10) Gert J. Van Tonder, Michael J. Lyons, and Yoshimichi Ejima. "Visual Structure of a Japanese Zen Garden," *Nature* 419 (2002): 359-360.

(11) 身近なところでは、ワープロソフトの英文スペルチェック機能で、修正候補の単語を検索するさいに、単語間のスペルの編集距離が使われている。Neil C. Jones and Pavel A. Pevzner（渋谷哲朗、坂内英夫訳）『バイオインフォマティクスのためのアルゴリズム入門』共立出版、二〇〇七年、一二九—一三〇頁参照。

(12) 絵巻の転写関係を数値化する場合には、記号単位よりも記号ブロック単位で編集距離を求めたほうがより適切だと考えた。

- (13) 小松和彦前掲書、二四九―二五四頁。
- (14) これらのうちスペンサーB本は、詞書と冒頭の二体の鬼の重複部分を除いて分類した。
- (15) Minimum spanning tree. 伊理正夫、白川功、梶谷洋司、篠田庄司ほか『演習グラフ理論―基礎と応用』コロナ社、一九八三年、九六―九九頁参照。
- (16) 小松茂美前掲論文、一三二頁。
- (17) ただし、仙台市博本には「鍋蓋を被った鬼」そのものがない。